

豊かな学び手を育てる

授業観をアップデートする

宮津光太郎（熊本市立城南小学校）

概要：学習指導要領で求められている3つの資質・能力を育成するためには、タブレット端末を授業でどのように使うかという考えではなく、タブレット端末を使って授業をどのように変えるのかという考えが必要である。学校の中にはICTの活用が得意な教師もいれば、そうでない教師もいる。教師のICT活用スキルの差によって、児童の資質能力の育成に差が出てはいけない。そのために学校全体として、子供たちの創造的な学びにおけるタブレット端末の効果的な活用をどのように広げていったのかを伝えたい。

キーワード：プロジェクト学習、タブレット端末、パフォーマンス課題、ルーブリック

1 はじめに

2020年度中には全国の自治体の99%以上が子供たち1人1台端末と、高速大容量の通信ネットワークの整備が進む。授業中にノートや鉛筆などの文房具と同じような感覚でタブレット端末を使うことが当たり前になってくるのであろう。タブレット端末は、情報の収集、記録、表現など様々な場面で効果的に使うことが考えられる。しかし、これまで一般的に行われてきた一斉指導の中でタブレット端末を活用ことだけ考えても、子供たちに予測不可能な未来社会を生きていく上で必要な資質・能力は育成することができるのかは疑問である。

子供たちを豊かな学び手に育てるためには、教師の授業観を変える必要がある。教師が教える授業から、子供が学びとる授業を目指して学校全体でチームとして取り組んできたことについてまとめる。

2 実践の概要

(1) 自主研修会「タブレットcafe」

本校では2019年度に3人に1台のタブレット端末が導入されることが決まっていた。そこで、2018年度から放課後の時間を使ってタブレット端末の活用についての自主研修会を行って

きた。基本的な操作方法から、プレゼンテーションの作り方、動画編集など、タブレット端末の機能を知って、教師が慣れるところからスタートした。最初は機器の使い方だけだったが、続けていくうちにタブレット端末を授業でどのように使えばよいかという内容に発展していった。昨年度はタブレット端末を使ったプログラミング教育のワークショップを3回実施して、参加した教師からプログラミング教育のイメージを持つことができたという、前向きな感想が多かった。

(2) 遠隔授業

昨年度の3月から休校が始まり、そのまま新年度を迎えた。本校では4月の時点では3～6年生の子供たちを対象にオンラインで遠隔授業を行うことにした。遠隔授業に向けての校内研修を行い、まずは健康観察からスタートしていこうということになった。遠隔授業が始まって、間もなくして職員も交代で在宅勤務になったことで、遠隔授業についての情報交換をすることが難しくなった。そこで、遠隔授業についての情報交換の会をオンラインで行うことにした。自主研修としての取り扱いだだったが多くの職員が参加してくれた。それだけニーズが高かった

のだろう。情報交換会後「課題づくりに悩んでいたのが勉強になった。」「課題をやって終わりではなく、友達の考えを知ってさらに良いものにするという学びが参考になった。」という感想をもらい、遠隔授業でどのような授業を目指せばよいのかというビジョンを共有することができたと感じた。

学校再開後の校内研修でも遠隔授業で取り組んだ子供たちの成果物交流会を行った。子供たちが遠隔授業でも創造的な学びができたことを共有し、この経験を教室での学びにもつなげていきたいと考えた。

(3) プロジェクト学習

子どもたちが主体的に学びとる授業を目指して、本校では教科の学習にプロジェクト学習を取り入れることにした。子どもから問いを引き出し、そこからパフォーマンス課題を提示する。その課題に取り組んだ成果物を、どのように評価するのかというルーブリックを提示し、教師と子どもで目指すべき方向を共有するようにしている。1学期に全学年でプロジェクト学習に取り組んでもらい、その取り組みで創られた子どもたちの成果物を交流することを通して、成果と課題を明らかにしていった。

(4) どのように学ぶか

どのような学習でも、自分の学びを振り返る時間は重要である。一方で、何の視点も提示することなく授業終末に振り返りをノートに書かせては、ただの感想になってしまうであろう。そうならないためには、どのような視点で学びを振り返らせるかが大切になってくる。そこで、低、中、高学年ごとに学び方のルーブリックを作った。学年部で、子どもたちにどのように学んでほしいかという、目指す子どもの姿を出し合い、それらを主体的な学び、対話的な学び、深い学びの3つの視点で整理してもらった。情報を整理し、視点ごとに評価基準を明文化していった。それを学年ごとの系統性を持たせることができるように話し合い、学び方のルーブリックを完成させた。(表1)

	S	C
主体的な学び	課題解決のために見通しを持ち、粘り強く学習に取り組むことができた。	課題解決に向けて学習に取り組むことができなかった。
対話的な学び	課題解決のために友達のよさを認めながら積極的に対話することができた。	自分のことだけしか考えず、友達と対話することができなかった。
深い学び	新しい気づきや問いをもち、課題の解決やこれからの生活に活かすことができる学びがあった。	新しい気づきや問い、考えなどをもつことができなかった。

表1 学び方のルーブリック(高学年を一部抜粋)

(5) 授業研究会

2学期から、授業研究会も実施している。昨年度までの授業研究会とは違い、45分の授業だけが話題になるのではなく、単元の授業設計デザインや子供が学び手として育てているかが話題の中心になっている。

3 成果

これまでの取組を通して、タブレットの利用率も高まってきており、低学年から様々な教科での活用が進んでいる。また、各学年でパフォーマンス課題やルーブリック評価を活用した授業実践も増えてきている。まずはチャレンジしてみて、課題を共有しながら更に実践を深めていっている。そのトライアンドエラーの繰り返しが授業観のアップデートにつながっていると感じている。

4 今後の課題

今年度取り組んだことを職員が変わっても、引き続き継続していくことができるようにしていく必要がある。そのためにカリキュラムマネジメントは必須である。今年度の実践記録や教材、子供の成果物を整理し、共有することで継続して取り組みやすくなるを考える。まずは学年部で成果と課題を明らかにし、それを学校全体として系統立てて整理することで次年度に活かしていけるようにしたい。

参考文献

西岡加名恵, 石井英真(2018)Q&A でよくわかる! 「見方・考え方」を育てるパフォーマンス評価